

令和7年度 町単 まちづくり共創構築業務

令和7年度の取り組み、および仕組みについて

理想の軽井沢町を 私たちが共に描き、 共に叶えていくための仕組み

対話・共創・未来



理想の軽井沢町を 私たちが共に描き、共に叶えていくために

軽井沢町は、自然が豊かで文化も魅力的な場所ですが、

「自然を守りながら町をどう発展させるか」

「住民や別荘の方々と観光客が共に気持ちよく過ごせるにはどうするか」

「今後予想される少子化や人口減少の変化にどう向き合うか」

といった、いくつもの問題を抱えています。

だからこそ、**住民、NPO、地元のお店や会社、役場の人など、いろいろな立場の人が同じ目線で話し合い、一緒に町のことを考える“共創”がとても大切です。**

今回の取り組みでは、軽井沢町の課題を解決し、これからも住みやすい町にしていくために、住民や別荘の方々、地域の活動団体やNPO、企業というように多くの方々の協力のもと、丁寧に対話やインタビューを重ねながら、軽井沢ならではの新しい「まちづくりの形」を見つけていくことを目指し、これまでの活動の成果をご紹介します・ご提案します。



軽井沢町 土屋町長からのメッセージ

軽井沢のまちづくりは、今、大きく変わろうとしています。これまでは行政が方向を示してきましたが、これからは皆さん一人ひとりが「どんな軽井沢の未来を望むか」を主体的に語り、共につくっていく時代です。今回の取り組みは、その大切な第一歩です。

私が大事にしたいのは、**信頼とリスペクト**です。SNSのように意見をぶつけ合うのではなく、互いを尊重しながら対話する文化を軽井沢に根付かせたいと思っています。意見が違うことは当たり前で、その違いこそが未来をつくる力になります。

私が**目指すのは「持続可能で魅力ある軽井沢」、そして「誰ひとり取り残さないまち」**です。その土台となるのは、**皆さんの軽井沢を思う気持ち=軽井沢愛**と、**よりよい未来をつくる力=軽井沢力**です。

軽井沢には住民だけでなく、別荘の方、二拠点居住者、観光客など多くの方が関わっています。だから私は、人口ではなく満足度・幸福度をまちづくりの中心にしています。

皆さんが「ここにいて幸せだ」と思える町を、一緒に育てていきましょう。



第1回対話の場でのトークセッションより

2025年8月に開催された第1回対話の場では、まず初めにみんなとつくる軽井沢 福原未来さん、軽井沢町役場 浅賀龍紀さん、ほっちのロッチ 藤岡聡子さんが、それぞれの立場から「**軽井沢は自然とともにある町であり、その環境を守りながら未来につなげたい**」という共通の思いを語り合いました。

福原さんは、移住者として感じた**住民の寛容さや多様性を大切に、いろいろな人のつながりが見える形にしたい**と話しました。浅賀さんは、地元で育った経験から、**子どもたちに思い出や愛着が残る町にしたい**と考え、地域活動を通じて恩返しをしたいという気持ちを語りました。藤岡さんは医療の立場から、医療と暮らしをつなげ、町全体が健康で豊かになる未来を思い描いています。

立場は違っても、**3人とも「自然を守り、人とのつながりを育て、次の世代へ受け継ぐ町にしたい」という思いが共通**しています。三者の活動が重なり合うことで、軽井沢の未来はさらに豊かになっていくと感じられる内容でした。



第1回対話の場から導いた叶えたい軽井沢町のテーマ

第1回対話の場には約30名が参加し自由な議論から**軽井沢町の未来像として5つのテーマ**が浮かび上がりました。

これらのテーマは固定的な優先順位を持つものではありません。住民一人ひとりの関心や地域の状況に応じて柔軟に選択・横断されることを前提とし、**軽井沢町に関わる人たちの「やりたい」「守りたい」という思いを言語化**したものとなります。



A) 自然や環境を大切にすまち

浅間山や森、水などの自然を守りながら、環境にやさしい町。観光も自然と調和させ、環境先進都市。

B) 生活（暮らし・保養）と観光が調和するまち

観光でにぎわう一方、町に住む人の暮らしも大切に、混雑や住宅の問題を解決しながら、生活（暮らし・保養）と観光が両立できる豊かな町。



C) 安心して暮らせるまち

医療や子育てのサポート、防災の力を強めて、誰もが安心して暮らせる町。年齢や立場をこえて支え合えるつながり。



D) 文化や歴史を受けつぎ、新しい文化を生み出すまち

昔からの民話や歴史を大切にしつつ、若者や移住者も参加・参画できる文化活動。国際交流やデジタルも活用し、新しい文化。



E) 未来をつくる人とつながりを育むまち

若者や子どもが「また帰りたい」と思えるような学びや仕事の場、世代や地域をこえて交流できる仕組みを広げ、未来を担う人。

※これらの内容は、参加者による自由な議論から生まれたものであり、町として決定した施策や将来像ではありません。

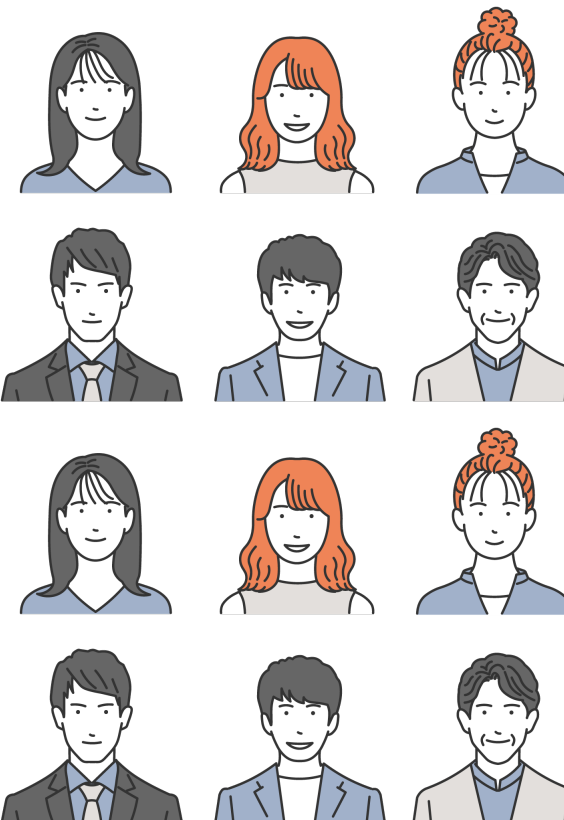
キーパーソンインタビュー

第1回対話の場と並行して、軽井沢町で活躍される方々（13名）にもインタビューし、それぞれの立場から様々な意見を頂戴しました。以下が要約となります。

軽井沢町の魅力は、豊かな自然と歴史ある文化が生み出す特別な雰囲気にあります。森の静けさや四季の美しさの中で、地元の人、別荘の人、移住者、観光客など、**さまざまな立場の人が自分のスタイルで町と関わり、お互いを尊重しながら過ごしています**。一方で、若い世代の減少や地域活動の担い手不足、住民同士のつながりの弱さなどの課題も見えてきています。

未来の軽井沢として**多くの人が語ったのは「誰もが軽井沢の一員として誇りを持てるまち」**です。**自然とともに心豊かに暮らし、自分の得意なことを生かして地域に関われる“ウェルビーイングなまち”**です。

その実現に向けて、**「好き」や「関心」を共有できる仕組みや、気軽に集まれる対話の場、デジタルとリアルを組み合わせたつながりの工夫など、軽井沢らしい共創のアイデアが出されました**。人と人、人と自然をつなぎ、軽井沢の未来をよりよくしていく力になると期待の声が寄せられました。



WEBアンケート

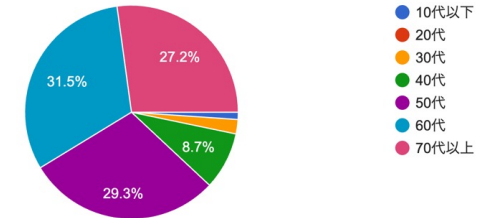
第1回対話の場と同様に、より多くの方々の声を聞くためにWEBアンケートを実施し、92名の回答がありました。以下が要約になります。

「自然を大切にしながら、地元の人、別荘の人、移住者、観光客など、さまざまな人が仲良く暮らせる軽井沢を守りたい」という共通の意見が多かったです。魅力としては、四季の自然、明治から続く避暑地文化、国際的にも知られる上品な雰囲気が多く挙げられました。一方で、急な開発や観光客の増加による自然破壊、渋滞、光害など「軽井沢らしさ」が失われることへの不安も強く、特に環境を守りながら観光とどう付き合うかが大きな課題とされています。

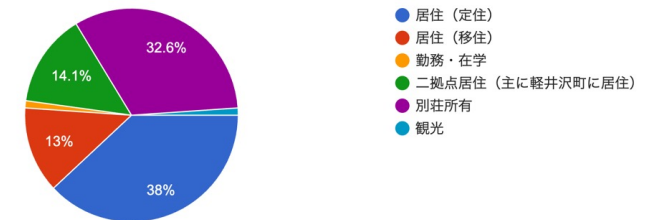
叶えたい軽井沢町像は「静かで上質な町」「多世代・多文化が共に生きる町」「自然と文化が息づく町」が多く挙がり、観光とのバランスをとりつつも、“暮らしやすい町”（暮らし・保養）にしたいという方向性が見えました。高齢者の移動支援や子育て環境、公共交通や医療・介護の充実を望む声も多かったです。

実現には、行政だけでなく住民や企業が一緒に話し合う「共創のまちづくり」が必要で、環境を守る計画やルールづくり、対話や学びを通じた意識づくりが大切という声が寄せられました。

年代
92件の回答



軽井沢町との関わり 一番近い内容を選択してください
92件の回答



軽井沢町らしいまちづくりの仕組みのアイデア

WEBアンケートでは、**軽井沢の未来を形づくるために「住民・行政・企業が本音で語り合える場」と「透明性のある活動と体制」が大切**との声が多く寄せられました。特に自然を守るための開発ルールや環境学習の充実に加え、SNSやボランティアを活用した交流の仕組みづくりも期待されています。行政がビジョンを示し、住民と共に町をつくる共創が期待されています。

また、キーパーソンインタビューでは、**「好き」「得意」「関心」で人をゆるくつなぐ仕組みを作り、多様な立場の人が参加・参画できる**土壌を整える考えが示されました。**町民、別荘所有者、企業、行政がテーマごとに集い、小さな実践を積み重ねることが大切**で、デジタルとリアルの場を組み合わせ、関わる人を広げながら継続的な共創を生み出すことが鍵です。

WEBアンケートでは自然を守りながら安心して話し合える**「共感を育む対話の場」**が、キーパーソンインタビューでは好きなことや得意なことに関われる**「共創による実践」**が重要だと示されました。**この二つが重なり合うことで、軽井沢町の未来をみんなで育てていく力が生まれる**はずです。



共感を育む対話の場



共創による実践

軽井沢町らしいまちづくりの仕組み・仕掛け

共感と共創が循環するまちづくりの二層モデル

軽井沢町らしいまちづくりとは、**理念にとどまらず実装までを見据えた仕組みづくり**です。行政や一部の人が決めた方針に従うものではなく、町民、別荘所有者、二拠点居住者、観光で訪れる人など、軽井沢に関わる一人ひとりが主体となり、対話と実践を積み重ねながら未来を形づくっていきます。その全体像を示したものが「**共感と共創の二層モデル**」です。

第1層は「共感を育む対話の場」。立場や背景を越えて集い、「どのような軽井沢であり続けたいか」「何を大切にするのか」といった価値観を共有します。ここでは、**すぐに結論を出すことよりも、安心して語り合える信頼の土壌を耕す**ことを重視します。**意見の違いを受け止め合うことで、信頼とリスペクトを土台とした関係性が育まれます**。

第2層は「共創による実践」。住民・事業者・行政・共創コーディネーターが役割と責任を明確にし、**小さな実践から始めます**。成果を共有して参加者を広げながら、施策や制度とも接続し、**5つのテーマの実現へと段階的に発展させます**。

※共創コーディネーターなどの役割は後述します



共感と共創が循環するまちづくりの二層モデル

「共感を育む対話の場」作りに向けて

5つのテーマの実現に近づくように以下の対話からスタートしませんか？

① 森と共に育つ軽井沢を考える

住民が森を守り育て、未来へつなぐ仕組みを考える。

案) 森を守る方法を住民・別荘所有者・企業が共に対話し、寄付や作業にも協力

② 静けさと美しさを守る町の決まりを対話する

住民の思う“軽井沢らしさ”を大切に作る仕組みを考える。

案) 経済合理性（お金）でなく、静けさや美しさという軽井沢らしい美学による優先順位について対話して提案する

③ 二拠点・多拠点でつながる軽井沢の輪

住む場所が違って、好きなことで町と関われる仕組みを考える。

案) 住民・別荘所有者・二拠点居住者・観光客が気軽に交流して、相談もできるオンラインコミュニティ



④ 軽井沢のしあわせを語り合う

町のみんなで「しあわせ」を話し合い、町づくりに生かす。

案) 住民や別荘の人の「しあわせ度」「自然への満足度」を毎年語り合い、そして、定量的に把握する

⑤ 軽井沢まちづくり研究室（テーマ検討）

住民が中心になって未来の暮らしを試す場を考える。

案) 「車以外の移動手段の導入」「混まない時間・道を選ぶ工夫」、「バイオマスなどの再生可能エネルギーの導入促進」、「暖房で使用するエネルギーの節約」など、小さく試したいプロジェクトのテーマを考える。

共感と共創が循環するまちづくりの二層モデル

「共創による実践」に向けて

5つのテーマの実現に近づくように以下の実践からスタートしませんか？

① 自然の中で語り合う軽井沢

自然の中で語り、本音で町の未来を考える場をつくる。

案) 会議室ではなく、森や庭で気持ちよく話す集まりを開く

② 「軽井沢力」でつながる場

好きなことや得意なことで人がつながりを地図形式で可視化する。

案) 「子育て」「森の手入れ」「絵を描く」など、自分の関心事を登録し、仲間意識を醸成して活動しやすい環境を育む

③ 「もうひとつの地元」参加・参画制度

二拠点居住で暮らす人も町づくりに参加・参画できる制度を提案する。

案) 住民でも観光客でもない、新しい関わり方をつくり、枠を越えてまちづくりに参加・参画できる機会をつくる



④ 軽井沢しあわせのものさし

みんなのしあわせ度を向上させる活動をする。

案) 毎年発表されるしあわせ度を向上させるプロジェクトをし、住民主体で推進する

⑤ 軽井沢まちづくり研究室（実践）

住民が主役となり、新しい暮らし方を小さく試す場をつくる。

案) 「静けさを守る交通」「森と暮らしのエネルギー」など、小さく試したいプロジェクトを実際に実施する

みんなで作る軽井沢の未来：新しいまちづくりモデル

新しい仕組みを阻む「壁」と「対策」



発言格差の固定化
一部の有力者の意見が優先されがち

多層的な対話設計
少人数グループでの対話やファシリテーターの関与で誰もが発言しやすくなる

まちづくりへの心理的距離
「自分には関係ない」と感じる人が多い

#子育て
#自然
関心ベースの参加導線「#子育て」「#自然」など、「好き」を起点に参加できる入口を多数用意する。

活動の不可視化
誰が何をしているのか見えづらい

デジタル基盤の活用
活動や想いを共有できるオンラインマップやポータルサイトで「見える化」する。

土屋町長のビジョン



「主役は、皆さん一人ひとりです」
住民が主体的に未来を語り、共につくる時代へ。

「信頼とリスペクト」を文化に
意見の違いを尊重し、対話を通じて未来をつくる力を育みます。

人口より「幸福度」をまちづくりの中心に
「ここにいって幸せだ」と思える、誰ひとり取り残さない町を目指します。

共感と共創が循環するまちづくりの二層モデル

共感と共創の二層モデルを動かす6つの共創パートナー

軽井沢町のまちづくりは、多様な立場の人々によって支えられています。そのため、住民主体を実現するには、誰がどのような役割を担うのかを整理し、協働の関係を築くことが重要です。

まず**主となるのは、町民、別荘所有者、二拠点居住者などの「生活者層」と「関係人口層」**です。日々の暮らしや保養を通じてまちの変化を体感し、課題や理想を最も身近に抱く存在です。次に、**観光・宿泊・開発・文化施設などの「事業者層」**。事業活動はまちの景観や経済など、まちの姿に与える影響は大きく、住民との対話を通じて軽井沢らしさを共有し、協力関係を築くことが求められます。

行政や医療・教育・環境分野の「専門家」は、住民の声を制度や施策へと反映させる役割を担います。そして対話の場を支える**「共創コーディネーター」**は、**固定的な組織ではなく“つなぐ機能”として設計**します。少人数のコアチームと登録制サポーターにより、相談対応、マッチング、ファシリテーション、広報などを分担。小規模実証の裁量を持ちながら、政策決定は町が担うという役割分担を明確にし、持続可能な協働体制を築きます。

生活者層

町民（住民）・別荘所有者（保養）価値の担い手、意思形成の主役。
“軽井沢らしさ”を最も感覚的に把握している。

関係人口層

二拠点居住者、観光客。外からの視点、新しい文化や協働をもたらす“外部の仲間”。



共創コーディネーター

対話の設計者、住民と行政・事業者間の“つなぎ役”。

事業者層

企業。まちの変化への影響力を持つ協働パートナー。環境配慮や保養地価値の共有が期待される。

専門家

大学・NPO 制度への橋渡し、透明な情報提供。住民の意思を制度へつなぐ。



行政（軽井沢町）

後方支援に留まらず、必要に応じて伴走支援し、住民主体を尊重しつつ共創を支える。

共感と共創が循環するまちづくりの二層モデル

共感と共創の二層モデルへの移行に向けた課題と対策

共感と共創の二層モデルによるまちづくりを進めるには、いくつかの課題への対応が欠かせません。第一に、**発言が一部に偏る**こと。少人数対話や進行ルールを設け、誰もが安心して意見を述べられる環境を整えます。第二に、**まちづくりへの心理的距離**。暮らしに近いテーマや関心を入口に、段階的に参加・参画できる仕組みを用意します。第三に、**行政依存**。住民が企画運営を担い、行政は伴走支援に徹する役割分担を明確にします。第四に、**活動の見えにくさ**。情報共有と透明性向上で信頼を高めます。第五に、**権限・財源の不明確さ**。住民・事業者・行政・共創コーディネーターの役割を明確化し、実行責任と判断権限を整理します。これらは**誰も取り残さないための仕掛け**です。

① 発言格差・対立構造

一部の有力者の意見が優先され、他の声が届きにくい。

① 対話の分散化・ファシリテーション

→ 少人数対話を基本とし、専門の進行役が「全員参加型の対話」を促進する。

② 参加への心理的距離

これまで関与してこなかった層が「自分には関係ない」と感じる。

② 関心ベースの参加導線

→ 「#子育て」「#自然」など好き”を起点に参加できるテーマ別サークルを設置する。

③ 行政依存・要求型の姿勢

行政にやってもらおう”という意識が根強い。

③ 住民主導の仕組み

→ 行政は支援役に回り、住民自身が企画・運営を担う。行政は情報・資源提供に特化する。

④ 活動の不可視化

誰がどんな想いで何をしているのか見えない。

④ デジタル基盤での共有・透明化

→ オンラインマップやポータルで活動やアイデアを共有し、連携を誘発する。

⑤ 権限・財源の不明確さ

住民主体だが、どこまで進めていいか判断に迷う。

⑤ 役割分担と責任設計

→ 住民・事業者・行政・共創コーディネーターの役割を明確化し、責任と権限を整理する。

共感と共創が循環するまちづくりの二層モデル

共感と共創の二層モデルを動かす8つの仕掛け

共感と共創が循環するまちづくりを継続するには、思いを具体的な行動へと結びつける仕掛けが欠かせません。前述した課題への対策として8つの仕掛けが考えられます。

第一に、自然や暮らし、しあわせについて**安心して語り合える対話の場**を整え、価値観を共有すること。第二に、**関心や得意分野を入口とした参加導線**を設け、初めての人も無理なく関われる環境をつくります。第三に、少人数対話や進行役の配置により**対話の質を高め**、多様な声を引き出します。第四に、**小さな実践の場**を設け、共創の経験を積み重ねます。第五に、**活動を共有・透明化**することで、新たな参加・参画と継続性を生み出します。第六に、**実践する人・応援する人・専門的に支える人が選択的に関われる環境**を整えます。第七に、住民・事業者・行政・共創コーディネーターの**役割と責任を明確化**し、信頼ある協働体制を築きます。第八に、**小規模実証と振り返りを重ねる学習型の仕組み**を制度化し、段階的な発展を目指します。

8つの仕掛けは、共感と共創が循環する二層モデルという仕組みの属人化を防ぎつつ、持続可能な仕組みを築くためのものです。

① 価値観の共有基盤

興味関心事やしあわせなどを語り合い、正解を探すのではなく、相互理解を図る

② 参加導線

(関わりしろデザイン)
「#子育て」「#アート」など関心ベースの参加の入口をつくり、心理的距離を縮める。

③ 対話の質の担保

少人数対話やファシリテーションで発言格差をなくし、誰もが安心して語れる場を形成。

④ 小さな共同アクション

ゴミ削減や森の手入れなど、共同作業を通じて信頼関係を構築する。

⑤ 共有・透明化のデジタル基盤

活動や想いを見える化し、新たな参加・参画や連携の連鎖を生む。

⑥ 多様な参加形態の設計

強制的な参加ではなく、関心や状況に応じて選択できる関わり方を用意する。

⑦ 役割分担と責任設計

住民・事業者・行政・共創コーディネーターの役割を明確化し、責任と権限を整理する。

⑧ 小さく試し、学ぶ循環

小規模実証→振り返り→改善→拡張のプロセスを制度化する。

共感と共創が循環するまちづくりの二層モデル

信頼とリスペクトの文化の形成に向けて

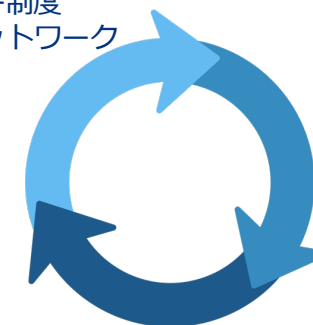
本モデルは、「共感を育む対話の場」と小さな行動を積み重ねる「共創による実践」を循環させながら、町の未来をともに育て続ける仕組みです。共感の場では、多様な立場の人々が価値観や願いを共有し、5つのテーマへの理解を深めます。共創の段階では、その思いを具体的な実践へと移し、試行錯誤を重ねながら実現への選択肢と可能性を広げていきます。これは完成形を固定する計画ではなく、段階的に育てていく「**生きているシステム**」です。社会や環境の変化に応じて柔軟に姿を変えつつも、共感（対話）と共創（実践）の循環は持続します。その**循環を支えるのが、人と人をつなぎ、対話の質を高める「共創コーディネーター」**です。さらに、オンラインと対面を組み合わせたハイブリッドな関わり方により、時間や立場を越えた参加・参画を可能にします。**5つのテーマを横断して共創パートナーが連携**することも持続性を高める鍵となります。

その**中心にあるのは、土屋町長が掲げる「信頼とリスペクト」を基盤とする文化形成**です。**違いを前提に互いを尊重し、丁寧な対話と小さな共同行動を積み重ねる**ことで、**誰ひとり取り残さないまちづくり**を目指します。

共創コーディネーター

- コアチーム（3～5名）
- 登録サポーター制度
- 専門家連携ネットワーク
- 行政窓口担当

デジタルとリアルの混合



テーマを横断する共創パートナーとの連携



5つのテーマの実現と「信頼とリスペクト」を基盤とする文化形成

共感と共創の二層モデル

信頼とリスペクトの文化を育む、住民主体のまちづくり。
町の未来像を示す5つのアジェンダと、それを実現するための
小さな活動の種「トリガープロジェクト」を提案します。

自然や環境を
大切にすまち



トリガープロジェクト(案1)
森と水の“気づき”
共有ウォーク

住民と専門家が森や水源を歩き、
守りたい点を共有する。

安心して
暮らせるまち



トリガープロジェクト(案1)
安心して何?対話会



医療、防災、子育てに関する
不安を共有する。

第1回対話の場から導いた
叶えたい軽井沢町の
5つのテーマ



未来をつくる人と
つながりを育むまち



共感の場

共創による実践

既存の活動

信頼とリスペクトの文化

軽井沢町まちづくり基本条例

生活と観光が
調和するまち



トリガープロジェクト(案1)
保養地としての
軽井沢対話会



住民と事業者が「守りたい日常」
を言葉にして共有する。

文化や歴史を受けつぎ、
新しい文化を生み出すまち



トリガープロジェクト(案1)
軽井沢文化を語る
小さな集い



町の歴史や個人の思い出を
語り合い、共有する。

トリガープロジェクト(案1)
未来の軽井沢対話会



若者と大人が集まり、
町の未来像について語り合う。



補足資料

第1回対話の場で語られた

軽井沢町の魅力・課題・叶えたい未来の軽井沢町

第1回対話の場には約30名が参加し、軽井沢町の魅力・課題・叶えたい未来の軽井沢町の姿を対話しました。

軽井沢町の魅力は、浅間山に囲まれた豊かな自然と四季の美しい景色、そして文学や民話が息づく文化。地元の人や移住者、別荘の人など多様な人が集まり、上品さと温かさが混ざり合う独特の雰囲気をつくっているという意見がありました。

一方、課題は、観光シーズンの混雑や交通渋滞、医療や子育ての支援不足、住宅価格の高騰などで、暮らしが大変になっていることです。また、移住者と地元の人とのつながりが弱くなり、文化が受け継がれにくくなっていることも問題で、生活と観光のバランスが必要という意見もありました。

魅力

- ① **豊かな自然と清涼な気候** 四季の美しさと高原の涼しさが魅力。
- ② **浅間山が与える大きな視野** 地域の象徴として未来を見つめる力となる。
- ③ **洗練された別荘地ブランド** 歴史が育んだ上質で独特の雰囲気がある。
- ④ **歴史・文学・民話が息づく文化** 物語が重なる「文化の舞台」としての価値。
- ⑤ **多様な人々が共に暮らす町** 住民・移住者・別荘客が生む活気と多様性。
- ⑥ **首都圏からの抜群のアクセス** 新幹線で気軽に訪れられる利便性が強み。
- ⑦ **新鮮な食と豊かな農産物** 高原野菜が食文化と地域ブランドを支える。
- ⑧ **国際的に知られる観光ブランド** 国内外に名が広く届く信頼と魅力。
- ⑨ **文化・スポーツイベントの盛り上がり** 多彩な催しが町に活気と楽しさを生む。
- ⑩ **自然と人が育む共生の営み** 自然を守りながら暮らす姿勢が町の個性。

課題

- ① **オーバーツーリズム** 混雑で暮らしと環境に負担がかかる。
- ② **不便な交通インフラ** 渋滞や公共交通の不足が生活を圧迫。
- ③ **医療体制の不足** 夜間・休日医療が弱く安心して過ごしにくい。
- ④ **介護・福祉の遅れ** 高齢化に対して支援体制が追いつかない。
- ⑤ **子育て支援の弱さ** 保育や児童施設が不足し子育てが大変。
- ⑥ **住宅価格の高騰** 高価格で若者や家族が住みにくい状況。
- ⑦ **自然環境の破壊リスク** 開発が森や景観を損なう恐れがある。
- ⑧ **コミュニティの分断** 住民・移住者・別荘客の距離が広がっている。
- ⑨ **文化継承の停滞** 伝統や民話が受け継がれにくくなっている。
- ⑩ **防災力の低下** 災害時に支え合う力が弱まりつつある。

第1回対話の場で語られた

軽井沢町の魅力・課題・叶えたい未来の軽井沢町

軽井沢町の魅力や課題を踏まえて叶えたい未来の軽井沢町も対話しました。

叶えたい未来の軽井沢町は、自然や文化を大切にしながら、誰もが安心して暮らせる町です。いろいろな世代や立場の人が支え合い、学びや交流を通じて地域への誇りを育てていきます。子どもたちが「また帰りたい」と思える、心豊かで持続可能な未来の軽井沢を目指したいという意見に集約されました。

叶えたい軽井沢町

- ① **安心して暮らせる町** 医療や福祉が充実し誰もが安心。
- ② **子どもが戻りたい町** 成長後も住みたいと思える環境づくり。
- ③ **高齢者にやさしい町** 老後も安心できる多世代共生の社会。
- ④ **観光と生活が調和する町** 観光地と住民の暮らしを無理なく両立。
- ⑤ **自然と共生する環境都市** 自然を守りながら持続可能に発展する町。
- ⑥ **文化と民話を受け継ぐ町** 伝統を次世代へつなぎ新しい文化も育む。
- ⑦ **浅間山のように広い視野をもつ町** 高い視点で未来を見据え行動できる地域。
- ⑧ **多世代・多様な人がつながる町** 立場を超えて学び支え合うコミュニティ。
- ⑨ **循環型経済で暮らせる町** 自然と経済の循環を生み出し持続可能に。
- ⑩ **誇りをもって語れる軽井沢** 住む人も訪れる人も誇りを感じる町。



第1回対話の場から導いた叶えたい軽井沢町のテーマ案（詳細）

「自然・文化・人の多様性を活かし、観光と生活を調和させながら、誰もが安心して暮らし、学び、誇りを持てる持続可能な軽井沢町を共創する」

- 自然：浅間山や豊かな環境を守り育み、環境先進都市へ
- 文化：民話や歴史を継承し、新たな文化を創造
- 人：多様な人々がつながり、多世代共生を実現
- 生活：医療・福祉・子育てを充実させ、安心の基盤を整備
- 経済・観光：観光と住民生活を調和させ、循環型経済を形成
- 未来：子どもが戻りたい、誇れる町として持続可能に発展

自然・環境を活かした持続可能なまちづくり

- 魅力：豊かな自然環境・浅間山の象徴性
- 課題：オーバーツーリズム、環境破壊の懸念
- 理想：自然と共生する環境先進都市

小テーマ

- 森林・水資源の保全と循環型利用
- 浅間山を軸とした高い視座・広い視野の育成（教育・観光）
- 環境配慮型観光の推進（グリーンツーリズム・カーボンニュートラル施策）
- 自然と文化を結びつけたエコツーリズムの展開

観光と生活の調和による豊かな暮らし

- 魅力：国際的観光地ブランド・アクセスの良さ
- 課題：オーバーツーリズム、交通混雑、住宅価格高騰
- 理想：観光と生活の両立、誇れる軽井沢

小テーマ

- 観光客分散とシーズンオフ活用の仕組み（ワーケーション・長期滞在）
- 公共交通・自転車・徒歩中心のモビリティ強化
- 住宅政策による若者・子育て世代の定住促進
- ブランド力を活かした「暮らす観光地」への転換

安心して暮らせる基盤づくり

- 魅力：人と人のつながり・多様な住民構成
- 課題：医療・福祉の不足、子育て支援の脆弱さ、防災力の低下
- 理想：誰もが安心して暮らせる町、高齢者に優しいまちづくり

小テーマ

- 医療・福祉インフラの強化（夜間医療・在宅介護支援）
- 子育て支援拡充と多世代交流施設の整備
- 防災・減災コミュニティの形成（自主防災組織と多世代連携）
- 移住者・別荘所有者も巻き込む「支え合いネットワーク」の構築

文化・歴史の継承と新たな創造

- 魅力：民話・文学・文化イベント
- 課題：文化継承不足、コミュニティ分断
- 理想：文化と民話を受け継ぎ新たに創る町

小テーマ

- 民話や地域物語のアーカイブ化と教育活用
- 若者・移住者も参加・参画できる文化活動の仕組みづくり
- 国際交流イベントによる「軽井沢文化」の再発信
- デジタルとリアルを融合させた文化継承の仕組み

未来を担う人材とコミュニティの創出

- 魅力：多様な人材・人と自然の共生
- 課題：若者定住困難、コミュニティ分断
- 理想：多世代・多様な人々がつながる町、子どもが戻りたい町

小テーマ

- 学びと仕事の場の創出（地域企業×教育機関×リビングラボ）
- 若者が戻りたくなるキャリアモデルの提示
- 移住者・二拠点居住者を活かす「共創プラットフォーム」設立
- 多世代交流を促す仕掛け（祭り・スポーツ・地域活動）

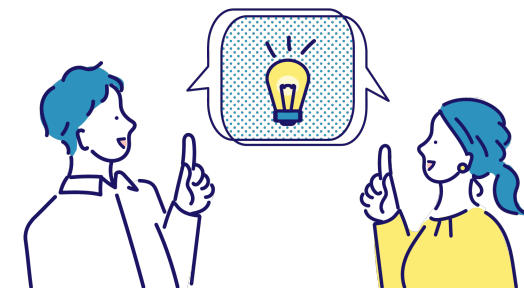
アンケートやインタビューを通じたアイデア（詳細）

共感を育む対話の場

- ① 住民・行政・企業の対話の場づくり 対等に議論し合う協働の場を設ける
- ② 自然保全を軸とした都市計画 森林保護と開発抑制を明確に位置づけ
- ③ 開発業者への厳格なルール化 環境破壊を防ぐ法的枠組みの整備
- ④ 教育・交流を通じた共創文化育成 学びと参加で未来をつくる意識醸成
- ⑤ 行政のビジョン提示と進捗レビュー 町長主導で中長期目標を定期評価

共創による実践

- ① 対話の場の定着 定期的な共創の場を設ける
- ② ハッシュタグでつながる 「好き」や関心軸で人を結ぶ
- ③ 小さな実践の積み重ね 行動から学びを広げる
- ④ デジタル×リアル融合 関係人口を巻き込む仕組み
- ⑤ 継続的共創モデル 共感で支え合う循環型まちづくり



共感を育む対話の場



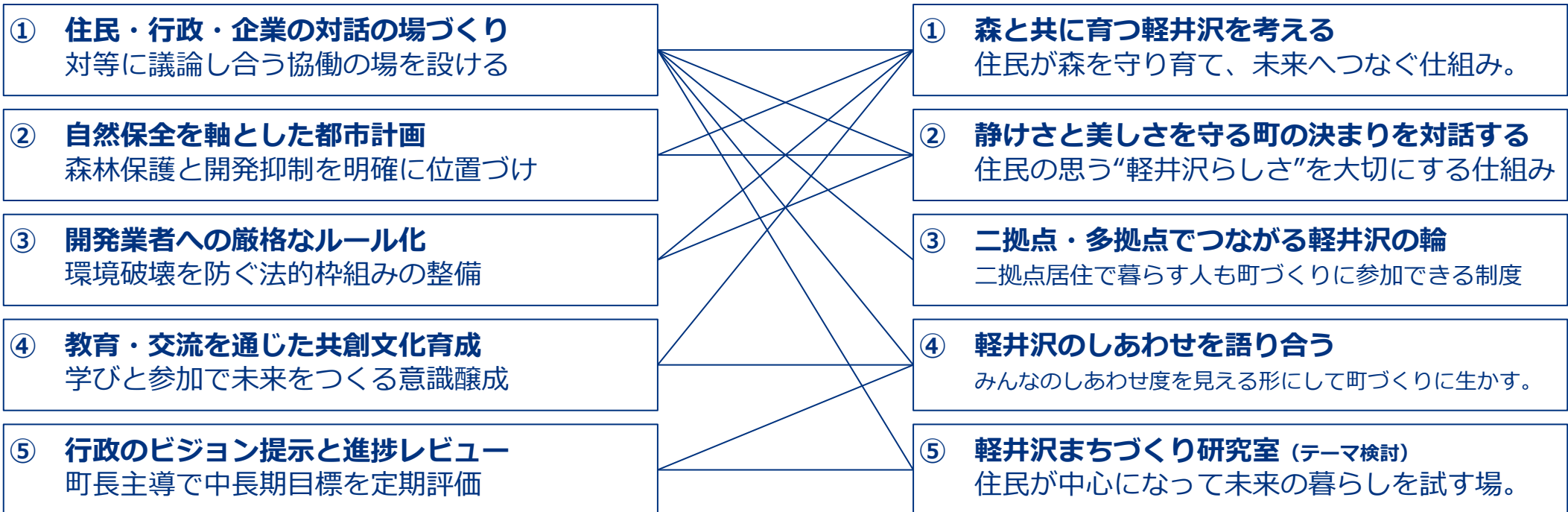
共創による実践

アンケートやインタビューのアイデアから導出した 軽井沢町らしいまちづくりの仕組み



アンケートやインタビューのアイデア

軽井沢町らしい「共感を育む対話の場」の仕組み



アンケートやインタビューのアイデアから導出した 軽井沢町らしいまちづくりの仕組み



アンケートやインタビューのアイデア

軽井沢町らしい「共創による実践の場」の仕組み

- ① 対話の場の定着
定期的な共創の場を設ける
- ② ハッシュタグでつながる
「好き」や関心軸で人を結ぶ
- ③ 小さな実践の積み重ね
行動から学びを広げる
- ④ デジタル×リアル融合
関係人口を巻き込む仕組み
- ⑤ 継続的共創モデル
共感で支え合う循環型まちづくり

- ① 自然の中で語り合う軽井沢
自然の中で語り、本音で町の未来を考える場。
- ② 「軽井沢力」でつながる場
好きなことや得意なことで人がつながりを地図形式で可視化する。
- ③ 「もうひとつの地元」参加・参画制度
二拠点居住で暮らす人も町づくりに参加できる制度。
- ④ 軽井沢しあわせのものさし
みんなのしあわせ度を向上させる活動をする
- ⑤ 軽井沢まちづくり研究室（実践）
住民が主役となり、新しい暮らし方を小さく試す場。

第2回対話の場で語られた

5つのテーマを実現するための関係者との共創に向けて

軽井沢の自然を守るためには、行政任せではなく、住民が主体となって動くことが重要だという意見が多く出されました。開発や観光による環境への負担、水源や川、ごみ問題などは、暮らしと深く関わる身近な課題であり、住民自身が現状を理解し、声を上げる必要があると共有されました。そのためには、住民を中心に、開発事業者、観光事業者、環境の専門家、NPO、さらには国や県の担当者とも対等に話し合う場が必要だと指摘されました。まず住民同士で「どんな自然を次の世代に残したいか」を話し合い、共通の考えを持つことが大切だという意見が示されました。具体的には、住民主体の環境会議を設け、自然の状態を学び合い、水源や川を見守る仕組み、ごみを減らす日常的な行動を町全体で広げていくことが提案されました。

自然や環境を大切にするまち



関係者

- ① **開発事業者との協働**
開発意図を理解し、住民と自然保全の共通土台をつくる。
- ② **環境・水資源の専門家**
浅間山～千曲川の水系など科学的知見を共有する相手。
- ③ **ゴミ削減の実践団体**
京都市の事例のように削減行動を牽引できる地域団体。
- ④ **国・県の制度担当者**
環境制度の枠組みや条例の限界を理解し共に改善する相手。
- ⑤ **観光・地域事業者**
生活と観光の調和を考え、環境負荷低減に協力する主体。

関係者の巻き込み方

- ① **住民が先に意思形成**
住民が課題・理想を整理し、共通方針を持って対話に臨む。
- ② **開発者との対話の場づくり**
開発の背景と地域の懸念を共有し、相互理解を育む。
- ③ **国・県へ実態を共有**
環境負荷や住民の声を直接伝え、制度改善のきっかけにする。
- ④ **水環境課題の共有**
水源や河川の知識を広め、共同で守る意識を醸成する。
- ⑤ **行動から共感を広げる**
ゴミ削減など日常の行動から巻き込みの輪を広げる。

第2回対話の場で語られた

5つのテーマを実現するための関係者との共創に向けて

軽井沢は単なる観光地ではなく、「静かに過ごす保養地」であるという原点を、住民自身が改めて大切にすべきだという意見が共有されました。近年、民泊の増加や観光客の影響により、生活環境への不安が高まっていることから、住民が主体となって課題を整理し、町と一緒にルールを考えていく必要性が指摘されました。住民や別荘所有者、宿泊・観光事業者、町役場や町議会が対話を重ね、価値観を共有することが重要だとされています。具体的には、迷惑民泊への対応として、民泊の種類を正しく管理することや、住民が相談できる窓口を設けることが提案されました。また、保養地としての軽井沢の価値を、住民だけでなく訪れる人にも伝えていくことが、観光と生活の調和につながるという意見が出されました。

観光と生活が調和するまち



関係者

- ① **住民・別荘所有者**
生活環境を守り、保養地の価値を共有する中心的主体。
- ② **町議会・役場担当者**
住民の声を制度・条例へつなぐ重要なパートナー。
- ③ **民泊・宿泊事業者**
生活環境への影響を理解し適正運営に協力すべき相手。
- ④ **管理組合・地域団体**
地域の実態を把握し、ルール遵守を促す現場の支え手。
- ⑤ **観光関連事業者**
保養地の価値に沿った利用者対応・環境配慮が求められる。

関係者の巻き込み方

- ① **保養地認識の共有**
観光地ではなく保養地という前提を住民間で統一する。
- ② **住民主導の課題整理**
迷惑民泊など生活被害を住民が主体的に把握・提示する。
- ③ **町との対話強化**
制度運用のズレを共有し、改善策を住民から提案する。
- ④ **事業者へ環境説明**
民泊・宿泊事業者に生活環境への影響と遵守点を伝える。
- ⑤ **世代間で価値継承**
次世代が受け継ぎたい環境・文化を共に議論し共有する。

第2回対話の場で語られた

5つのテーマを実現するための関係者との共創に向けて

誰もが安心して暮らすためには、情報がわかりやすく届き、困ったときに助けを求められる仕組みが必要だという意見が多く出されました。特に、若い世代や高齢者、子育て世帯など、声を上げにくい人が取り残されないことが重要だと指摘されました。町や病院などが持つ情報を、住民が理解できる形で公開し、オープンに話し合う場をつくる必要性が共有されました。また、対話の場は平日の昼間だけでなく、夜や休日にも開き、より多くの人に参加できるようにすべきだという意見も出されました。具体的には、集まりに来られない人のもとへ情報を届ける訪問型の取り組みや、困りごとを早く見つけて支える地域のネットワークづくりが提案され、住民同士が学び合い、支え合う文化の大切さが確認されました。

安心して暮らせるまち



関係者

- ① **多様な地域住民**
若者・高齢者・子育て世帯など多様な声の当事者。
- ② **医療・病院関係者**
病院経営や医療提供の実態を住民に開く重要主体。
- ③ **情報発信の支援者**
SOSを拾い、必要な情報へ導く地域の橋渡し役。
- ④ **町の情報担当部署**
公的情報をわかりやすく届ける役割を担う部門。
- ⑤ **コミュニティ団体**
住民間のつながりを支え、学び合いの基盤をつくる存在。

関係者の巻き込み方

- ① **声を届ける訪問活動**
町が待つのではなく、住民側から家庭へ働きかける。
- ② **多様な参加時間設定**
平日昼に限らず夜・休日の場で参加機会を広げる。
- ③ **情報アクセスの支援**
若者や弱い立場の人が情報へ到達できる導線づくり。
- ④ **透明性の対話共有**
病院や町の情報を住民とオープンに議論する場を設ける。
- ⑤ **学び合いの文化形成**
住民が互いに知識を共有し支え合う関係を育てる。

第2回対話の場で語られた

5つのテーマを実現するための関係者との共創に向けて

軽井沢が持つ歴史や文化の価値を、まず住民自身が再認識することが大切だという意見が示されました。浅間山信仰や国際的な交流、山岳リゾートとしての歩みなど、軽井沢ならではの文化は、自然に残るものではなく、人が関わり続けることで受け継がれると共有されました。そのため、文化施設や学校、国際交流団体、宿泊・飲食事業者、文化活動を行う住民など、多様な人と場所がつながる仕組みが必要だとされています。具体的には、文化に関わる人や活動、場所を見える形でまとめる仕組みや、初めての人でも参加しやすくする案内役の存在が提案されました。小さな文化活動をきっかけに共感の輪を広げ、新しい文化が生まれる土台をつくることが重要だという意見が出されました。

文化や歴史を受けつぎ、
新しい文化を生み出すまち



関係者

- ① **文化施設・団体**
既存の文化資源を持ち発信の核となる主体。
- ② **学校・教育機関**
子ども世代へ文化を継承し新しい価値を育む場。
- ③ **国際交流団体**
軽井沢の国際性を文化として深化させる担い手。
- ④ **宿泊・飲食事業者**
地域文化を体験の形で伝える重要な協働先。
- ⑤ **文化活動住民**
趣味・表現活動を通じ新しい文化創出の源となる人々。

関係者の巻き込み方

- ① **原点共有の対話**
軽井沢の文化的価値を住民同士で再認識する場をつくる。
- ② **小さな行動の連鎖**
動きやすい団体から始め、共感者を増やし広げていく。
- ③ **国際・地域交流促進**
海外・地域内の文化交流を後押しする仕掛けを整える。
- ④ **ガイド役の配置**
一歩踏み出せない人を支えるファシリテーターを配置。
- ⑤ **文化担い手の紹介**
人や活動を可視化し、つながりや参加を誘発する。

第2回対話の場で語られた

5つのテーマを実現するための関係者との共創に向けて

軽井沢の未来をつくるためには、人と人とのつながりを継続的に育てる仕組みが欠かせないという意見が共有されました。地域住民だけでなく、子どもや教育関係者、開発事業者、町外から関わる人など、多様な人が関係人口として関われることが重要だとされています。まずは、区民やご近所同士など身近な対話を起点にし、使命感を持つ人が役割を持って動ける環境を整えることが大切だという意見が出されました。具体的には、オンラインとリアルの交流を組み合わせた場づくりや、テーマを持った連続イベントの実施、立場に縛られない対話の場の設置が提案されました。一人ひとりが「自分にも関われる」と感じられる関わりしろを広げることが、未来につながるかとまとめられました。

未来をつくる人と
つながりを育むまち



関係者

- ① **区民・ご近所層**
日常の土台となる最も身近なつながり手。
- ② **使命感ある住民**
未来づくりを牽引し道筋を示す地域リーダー。
- ③ **開発事業者**
街の変化に関わる主体として対話と協働が必要。
- ④ **教育者・講師陣**
子ども・若者の学びと関わりしろを広げる存在。
- ⑤ **軽井沢ゆかり人**
県外在住者など外から関われる潜在的支援者。

関係者の巻き込み方

- ① **身近な対話の起点**
区民・住民同士の対話からつながりを育む。
- ② **リーダーの役割提示**
使命感ある人が動きやすい役割と環境を整える。
- ③ **開発者との協働**
開発事業者と早期に対話し地域理解を深める。
- ④ **専門家との接点創出**
教育者・講師と継続的に接点をつくる仕掛け
- ⑤ **多様な参加の導線**
オンライン・リアル双方で参加しやすさを確保。

軽井沢町らしいまちづくりの仕組み・仕掛け

信頼とリスペクトの文化を育む、共感と共創の二層モデル

軽井沢モデル		自然や環境を大切にすまち	生活と観光が調和するまち	安心して暮らせるまち	文化や歴史を受けつぎ、新しい文化を生み出すまち	未来をつくる人とつながりを育むまち
共感の場		自然への違和感や守りたい想いを立場を越えて共有	暮らしの静けさや不安と、観光の価値を住民・別荘所有者・事業者が率直に共有する対話。	医療・防災・子育ての不安を、世代を越えて共有する対話の場。	軽井沢の文化や歴史を語り、次世代に残したい価値を共有する。	軽井沢の未来像を、世代・立場を越えて語り合う対話の場。
協働による実践	第1段階 実践	森や水源、ゴミ削減など身近な行動を試す	迷惑行為や生活影響への対応を、住民主体で小さく試行する。	見守り活動や情報共有の仕組みを住民主体で試行する。	小さな文化活動や表現の場を住民主体で推進する。	学びや交流の小さな企画を住民主体で実施する。
	第2段階 活動の共有・透明化と参加の拡大	活動と想いが見える化し新たな担い手を招く	暮らしを守る取り組みを共有し、共感する事業者や住民を増やす。	安心づくりの実践を共有し、新たな担い手を増やす。	人・場所・活動が見える化し担い手を増やす。	関わり方を共有し、新たな担い手を増やす。
	第3段階 テーマの実現	循環が定着し自然と共に暮らす姿が広がる	生活と観光が無理なく共存する状態が地域の日常として定着する。	支え合いが日常化し、安心して暮らせる環境が定着する。	文化が日常的に更新され続ける状態が定着する。	未来を担う人材が育ち、つながりが循環する。
5つの共創パートナー	生活者層	自然の変化を感じ行動する当事者	町民・別荘所有者が暮らしの違和感を起点に議論を進める。	高齢者、子育て世帯、若者が当事者として声を出す。	文化活動に関心のある住民が担い手。	若者・子ども・地域住民が主役。
	専門知・公的機関	制度と科学的知見で住民活動を支援	町役場・町議会が制度調整と住民提案の実装を支援する。	病院、福祉、町役場が情報と支援を提供。	学校・文化施設が継承と学びを支援。	学校・教育関係者が学びを支援。
	事業者層	環境配慮を通じ地域価値を高める協働者	宿泊・観光・民泊事業者が生活配慮型の運営に協力する。	地域事業者が見守りや防災に協力	宿泊・飲食事業者が文化発信に協力。	企業・事業者が機会提供に協力。
	共創コーディネーター	対話設計と関係調整で共創を支える	対話設計役が感情的対立を防ぎ合意形成を支える。	情報の橋渡しと対話設計を担う。	人と活動をつなぐ伴走役。	人と人をつなぐコーディネーター。
	関係人口層	外部視点や専門性で活動を後押し	長期滞在者やリピーターが保養地価値の理解を広げる。	医療・福祉分野の外部専門家が助言。	芸術家・研究者が外部視点を提供。	県外在住者やOBが応援役。

軽井沢町らしいまちづくりの仕組み・仕掛け

信頼とリスペクトの文化を育む、共感と共創の二層モデル

軽井沢モデル		自然や環境を大切にすまち	生活と観光が調和するまち	安心して暮らせるまち	文化や歴史を受けつぎ、新しい文化を生み出すまち	未来をつくる人とつながりを育むまち
8つの仕掛け (内、5つ)	価値観の共有基盤	森や水をテーマに安心して語る対話	「観光地ではなく保養地」という前提を語り合う場。	安心とは何かを世代横断で語る場。	文化の原点を語り合う対話。	未来像を語る対話。
	参加導線	好きや関心から気軽に関われる入口	暮らしの困りごとから参加できる入口設計。	日常の困りごとから関われる入口。	表現や関心から参加できる入口。	関心・得意から関われる入口。
	対話の質の担保	少人数対話と進行役で声の偏りを防ぐ	少人数対話で立場による発言格差を防ぐ。	声を出しにくい人への配慮設計。	挑戦を否定しない場づくり。	世代混成の少人数対話。
	小さな共同アクション	清掃や植樹など一緒に動く実践	ルール試行や現場改善を共同で行う。	見守り・防災訓練の共同推進。	展示・交流イベントの試行。	学び・交流の試行企画。
	共有・透明化のデジタル基盤	活動と人を見える化し循環を生む	対応事例や合意内容を共有する。	支援情報を分かりやすく共有。	文化資源データベース整備。	人材・活動マップ整備。
課題と対策	発言格差	少人数対話とファシリテーター配置	住民・事業者混成の少人数対話で是正。	訪問型対話で声を拾う。	ファシリテーター配置。	世代別・混成対話の併用。
	参加者の心理的距離	生活実感に近いテーマから参加	暮らし起点のテーマ設定で縮める。	生活圏内での対話開催。	小規模実践から参加。	気軽な参加設計。
	行政依存・要求型の姿勢	住民主体で動き行政は支援役	住民発意・行政支援の役割分担。	住民主体の助け合い促進。	住民主体の企画支援。	住民主導の企画推進。
	活動の不可視化	記録と発信で取り組みを見える化	対応内容と成果を定期的に公開。	支援活動の見える化。	活動と人を見える化。	関わりしろの見える化。

軽井沢町らしいまちづくりの仕組み・仕掛け

信頼とリスペクトの文化を育む、共感と共創の二層モデル

軽井沢モデル		自然や環境を大切にすまち	生活と観光が調和するまち	安心して暮らせるまち	文化や歴史を受けつぎ、新しい文化を生み出すまち	未来をつくる人とつながりを育むまち
小さな活動の種 「トリガープロジェクト」	案1	森と水の“気づき”共有ウォーク 住民と専門家が森・水源を歩き、違和感や守りたい点を共有。	保養地としての軽井沢対話会 住民・事業者で「守りたい日常」を言語化。	安心して何？対話会 医療・防災・子育ての不安を共有。	軽井沢文化を語る小さな集い 歴史・思い出を共有。	未来の軽井沢対話会 若者・大人が未来像を語る。
	案2	ごみ削減ミニチャレンジ（地区単位） 1地区でごみ量削減を試行し、成果を可視化。	暮らし影響ヒアリング&見える化 生活の困りごとを整理し共有。	見守りミニネットワーク試行 1エリアで住民主体での見守り。	文化ミニ実践（展示・表現） 小規模イベントを試行。	関わりしろ発見ワーク 得意・関心を共有。
	案3	水源・小川の見守りチーム立ち上げ 月1回の観察と共有。	迷惑行為対応の試行ルールづくり 1テーマ限定でルールを試す。	安心情報の整理・共有実験 必要情報を1枚に集約。	人・場所・活動の見える化 文化資源マップ作成。	小さな学び・交流企画 勉強会や体験会を試行。
	案4	環境アクション見える化マップ 活動と人をオンラインで可視化。	観光事業者との協働宣言（小規模） 賛同事業者を見える化。	夜・休日対話会の開催 参加しにくい層を巻き込む。	学校×地域の文化連携企画 世代を越えた参加。	関係人口つながり企画 県外在住者と交流。
	案5	開発・環境ミニ対話会 住民×専門家×事業者で小規模対話。	暮らし×観光事例共有会 良い事例を共有。	支え合い事例の可視化 小さな助け合いを紹介。	国際交流ミニプログラム 軽井沢らしい国際性を体感。	人と活動の見える化マップ 誰が何をしているか共有。